

第4回近畿圏広域地方計画有識者会議

議事要旨

日時:令和5年11月8日(水)14:00~15:35

会場:大手前合同庁舎 1階 共用会議室 1-1~1-3(Web併用)

出席者:小林座長、岡井委員、鎌田委員、澤柳委員、高橋委員、都司委員、橋爪委員
(Web出席)大串委員、奥野委員、船木委員

議事次第 1. 開会

2. 議事 (1)新たな関西広域地方計画について
(2)その他

3. 閉会

1. 開会

委員変更

- 神戸大学・忽那委員が解嘱となり、新たに大阪公立大学・二宮委員に委嘱となる。

挨拶

- 小林座長

2. 議事

(1)新たな関西広域地方計画について

【都司委員】

- 全体的に、ハード中心の内容という印象である。特に、関西交通ネットワークプロジェクトの記載で、総合交通体系や地域交通体系の施策がハード面中心となっているが、人口減少・少子高齢化の進展で、物流トラックや地方を支えるバスの労働力不足が課題である。また地方の交通については赤字路線の問題もあり、地域活性化プロジェクトの中でも地方交通のあり方を考えていく必要がある。ハードは整備したが、そこを走るものがないと何もならないため、人手不足に対して自動運転の取り上げも必要になる。人材としてもシニア人材や外国人材を活用する、その際に完全な自動運転に至らなくても安全なシステムを導入する等の方法で、幅広い人材の活用も考えていく必要がある。
- これが関西だ、というものをどう打ち出すかが難しい。
- けいはんな学研都市は、まちびらきから30年が経過し、3府県にまたがるエリアにおいて産官学共同で開発が進められてきたが、造成面積は7割程度に留まっている。けいはんな学研都市については、もう少ししっかり取り上げる必要があるのではないか。
- 特に、リニアや北陸新幹線の話もあり、そういったインフラの整備と合わせて今後関西文化

学術研究都市をどう活かしていくかが課題である。クラスター方式で開発されているが、地域間の交通によって制約を受けていることもあり、道路や公共交通の整備についても進めていくことで、クラスターが面として繋がり、エリアが成長していくことができれば、ある程度既存のストックを活かしながら次の時代をつくれるのではないかと考える。

【高橋委員】

- 前回の会議で、2050年を見据えた今後の10年の移動手段として、事業者協力型の自家用有償旅客運送の提案をした。自動運転のレベル5が中国で行われているという新聞記事が流れてくる中、2030年頃にヨーロッパが目指すのであれば、レベル5への移行期間の運転手不足、観光客にとってのラストワンマイルの二次交通は、自家用有償運送を事業者と協力して進めるべきである。既に道路運送法の改正の中に示されており、後押しするべきだと話し、実際にそうした流れが出ている。行政が観光で行うべきことはインフラ整備と規制緩和に尽きる。それを積極的に書いてほしい。
- 資料に、ほこみち制度の記述があった。大阪、神戸、姫路の3か所を取り上げていたが、それは第1号認定であったからだと思う。このほこみち制度が、例えば御堂筋が歩道化すると、コペンハーゲンのストロイエのように車道が歩道になることで人の賑わいができる。こうした規制緩和が観光につながると考える。
- 観光において必要なインフラ整備は、旅行者にとっての安心・安全、清潔感、ハードによる魅力づくり。ソフトは民間も巻き込んでやるべき話であり、地域観光についてはDMOが先行してやるべきことであるため、ハードによる魅力づくりが必要。地域のムードや雰囲気づくりも必要である。ほこみち制度ができるとテラス席がそこかしこにでき、いい雰囲気の御堂筋になると思う。そして二次交通、そうしたことを規制緩和とインフラ整備で行うことが必要で、それに関わることが世界を魅了する関西プロジェクトの中で大きく書いて頂くのが良い。
- 資料に書かれている言葉は、以前から言われていることである。例えば、国内交流の拡大における第2のふるさとづくり。30年前に私が民間企業で働いている時に、松下電器の労働組合でこうした議論を行い、組合として宿泊施設をつくり、第2のふるさとに繋がりをつくろうということをしてきた。歴史を踏まえてこれが必要だという反省の中で書いているかもしれないが、現在を生きる我々ももっとスピード豊かな規制緩和とインフラ整備をしていくことが、オーバーツーリズム対策にもつながると思う。この辺りを強調しておきたい。

【澤柳委員】

- ハード面の印象が強いため、ソフト面についても、関西人や関西の地域性・雰囲気を特徴的なものとして、関西らしさが出れば良い。
- 観光分野の担当として以前より話しているが、本日は2点話したい。
- 農業をしており、大阪産(もん)のイチゴの生産を勉強している。農山村の活性化や、農産物の拡大という言葉は良く聞き、プロジェクトにもなるが、現場に入ると昔から変わっていないこ

とも多い。特に今夏は暑かったので、気候変動による農村の現状がこうした計画でどこまでイメージされているかが気になる。

- 高齢者という言葉がネガティブにとらわれがちだが、活力ある元気なお年寄りというのはやることがあり、人とコミュニケーションができて、食生活のバランスも取れてという形で、元気な高齢者である。農山村に行ってそうした人に会うと元気になる。元気な高齢者とサポートしなければいけない高齢者のように、高齢者の考え方を分けるようにお願いしたい。
- 観光において、持続可能な観光という言葉が近年ひとり歩きしており、それについての議論が多くの地域でされている。事例として、アメリカインディアンが7世代先のことをイメージして今の生活が良いか判断していると聞いた。これは2050年の計画を立てており、間もなく見えてくる、我々も生きていられるかもしれない、という先のことをイメージした視点も必要。SDGs やサステナブルという言葉での観光も必要だが、一体何をすれば良いのか。スティックに集中的にやるということではできないし続かない。ナチュラルにできる範囲でできることをやる、というやり方もあると良い。

【鎌田委員】

- インフラのハードの観点でみると、6番の関西強靱化・防災連携プロジェクトにおいて、施策群の見せ方が大事だと考える。関西でこれから何をやっていくかの強調を工夫していただけないか。例えば、洪水・内水・高潮・土砂災害対策や地震・津波対策という書き方は、自然対策の種類として書いているが、これはほぼ全国的に行われている。これから進めていく防災の対策、減災の対策、災害時の対策、ということで、関西のインフラ整備・対策状況がどうなっているのかを横並びにして、どこが弱点でどこが満足しているかを見える化していただけると、我々も議論できる。そういう形で施策群を書きいただければ、どういう意識でどういう協力をすべきかがわかる。施策群の議論はこれからあるかと思うが、そこで具体的にお話したい。

【岡井委員】

- 関西にいてる中で、関西の位置付けが低くなってきているのを感じている。本社機能が移転しており、大企業を誘致するのは無理という中で、関西の魅力をどう高められるかを考えないといけない。歴史があり自然が近いことが関西の魅力だが、それだけをもって多くの人に関西に来てもらうというのは無理がある。
- まちづくりの分野では人中心のまちづくりが世界的な流れになっており、日本でも打ち出しているが、クルマ社会から脱却できていない状況である。大阪は御堂筋の車道を歩道化しようという話があり、なんばや姫路、神戸の駅前広場整備も進んでいる。そうした人中心の都市空間を売りにしていくことも、関西の計画としてはあり得る。
- 大阪では水辺空間、河川空間の活用もされており、これも加えて人中心を打ち出しても良いのではないか。

- 誰がするのかというところ、ハード整備が中心にならざるを得ないが、人のことにも触れてほしい。関西の課題は、女性が働いていないことである。高学歴の女性がいるが、専業主婦やパートタイムの仕事に就いている。大学があるので学生はいるが、優秀な学生ほど就職の時に東京に行ってしまうのが課題である。そうした人をいかに関西の中で高い収入で働いてもらうかを考えなければならない。今から大企業の誘致は難しいので、スタートアップを支援し、優秀な若者が起業しようと思える機運をつくっていく、という方法もある。コロナ禍による良い点は、オンラインで働けるようになった点であり、そうした点も活用していくと良いのではないか。

【大串委員】

- 1 点目は、関西らしさがないと改めて感じている。新しく先進的なものは関西から、ということで万博のレガシーをもう少し強く打ち出すのも有りかと考えている。自動運転の話も出たが、空飛ぶタクシーを関西圏で飛ばしていくことも重要ではないか。一つ大きな目玉にもなりうる。先進的なインフラ整備もそうである。未来の社会実験都市として夢洲が打ち出されているので、それとリンクした未来志向のインフラ投資の話も今からしておいて良いのではないか。
- 2 点目は、インバウンドの影響は京都などの一部の都市に限られている。新幹線ルートについて、福井・大阪ルートは計画自体もできていないが、リニアが通る間に新幹線の話が出てくる。その点も考えておいたほうが良いのではないか。
- 3 点目は洋上風力について、関西は計画そのものがない。一番大きな水素を扱える企業を抱えているので、それを打ち出すのは必須ではないか。関西は企業が東京に本社が行ってしまっ、という話はあるが、関西でしっかり準備ができれば企業集積も進むのではないか。エネルギー戦略を大きく打ち出すことは経済の観点からも肝要である。
- もう 1 つが医療ツーリズム。アジアと近いということで、大阪観光局と旅行会社が組んで医療ツーリズムを強く打ち出していくという話が出ている。関西の強みは様々な都市が近くて、医療ツーリズムにアクセスがいい。その関西の特徴を打ち出すべきではないか。

【奥野委員】

- 関西色は今後肉付けされていくとお聞きしたが、京都への文化庁移転の話を入れて頂きたい。
- また私は専門がスポーツであるが、関西色としては阪神タイガースが優勝し、経済効果も高い。関西は有数のプロスポーツチームがある。サッカーではガンバ大阪やセレッソ、サンガなど。バスケットボールも最近勢いがある。スポーツに関して書かれてはいるが、少し薄い。ハード面が多く、ソフト面が少ないと思うし、スポーツはただプロスポーツを見るだけでなく、人々がスポーツを応援する、またスポーツによって人が集まる面もある。例えば 2027 年に関西ワールドマスターズという大会が行われるが、スポーツツーリズムの発展や人が集まる起爆剤になる。そういった人がつながる、人を育てるという観点もある。部活動の地域移行をス

スポーツ庁が進めているが、中学校の部活動を外に委託するだけでなく、地域の方と共にすることでネットワークの広がりにもなる。そういったスポーツの活用の目線も必要と思っている。

- 地域活性化プロジェクトの誰もが安心して暮らせるまちづくりの中で、夫婦ともに仕事と家庭を両立するという記述がある。だが、夫婦に限ったことではなく単身で子育てされている方も今は非常に多く、そうした方も仕事と子育てを両立している。夫婦と書かれると気になる方もおられるので配慮が必要。それと健康に関する視点や、子ども目線・子育て目線で将来的な視点での計画として、子供や若者の視点も入れていった方が良いのではないかと感じた。

【船木委員】

- 関西ではないが、この夏に両親が豪雨被害で床上浸水して住めなくなった。豪雨災害や地震はどこでも起きると感じた。結局、目の前まで水が来ても逃げられず、床上浸水して消防団に助けを求め、ということになった。そこから考えるに、ハードの整備はもちろん重要だが、行政はそこまで細かく手が回らないのも実感で、地域力や自助・共助というのが大事と実感した。自助・共助というのは住民がいかに関心を持って自分達の住むまちをどんな風にしたいか、ということにつながる。ハード面だけでなく、ソフトであるとか住民が自分達のまちをどう考えるか、につながるような視点を本計画にも入れられればと思う。

【橋爪委員】

- 課題から語るのではなく、希望を持てる姿を描いてバックキャストで考える、ということをもう一度確認したい。全国計画でも未来に希望を持てる、次世代に引き継ぐ、というキーワードがちりばめられている。
- 1点目、そろそろ我々関西の計画を短くわかりやすいキャッチコピーで語る段階ではないか。九州圏の計画がわかりやすく、「アジアの成長センター アイランド九州」というキャッチコピーを中間段階で出している。内容を端的に示し、強いメッセージ性のある言葉を示さなければならぬ。
- 2点目、今回の計画で全国計画の重要なキーワードとして「シームレス」という言葉がある。これを近畿圏で受け止めると、国土全体をシームレスにするという意味と、関西全体をシームレスにするという両面があると思う。また、ハードや人と人の関係、とりわけ DX を絡めたシームレスという意味合いもある。世界と日本、あるいは日本国土全体、関西圏域というスケール感や枠組みを意識しながら、シームレスという概念の使い分けをしなければならない。
- 3点目、私たちは、どのように変化していくのかという方向性を語るべき。その意味で、今回は「マネジメント」が重要なタームである。ストック型の国土計画からマネジメント型への転換という意味合いが大きいように思う。文化財が多いということが書かれているが、ストック型で書かれている。そうではなく、ストックを上手く活用していく、あるいは利活用可能なストックがたくさんあるという書き方が求められる。細かい点だが、図では世界遺産の百舌鳥・古市古墳群が漏れている。大阪府から指摘があると思う。また、彦根城の城下町も世界遺産申請

に向けて尽力しているので留意されたい。

- 4点目、官民連携も大きな変化を示す概念になる。この点に関して、関西は昔から先進地であったと言っても良い。明治維新の後、京都では市民が寄付して学校をつくり、都市の近代化を促した。大阪も、主要な公共施設は市民や企業の寄付でつくられたものが多い。そのほかの都市でも、民間が公共の精神をもってまちを発展させてきた地域は多い。官民連携のよき伝統がこの地にあることを伝えながら、次世代の官民連携を謳うべきではないか。
- 5点目、関西文化学術研究都市の今後の方向性について、特記する必要がある。今は第4ステージであり、今後、第5ステージに入っていく段階だと思う。関西文化学術研究都市のひとつの特徴として、今後、道路や高速鉄道ネットワークにおける交通結節点という役割が強化されると思う。資料の図中に、代表的な交通結節点施設として、新大阪だけ示されている。他にもいくつか結節点を想定して、今後整備していくという方向性を出すべきだと思うが、関西文化学術研究都市もその候補となる。
- 6点目、大阪・関西万博に関しては、2025年の開催後には、レガシーの具体化に移る。本計画でも、ベイエリアの再開発などポスト万博の方向性を書いておくべき。
- 7点目、首都機能のバックアップについて、防災だけが示されているが、バックアップするには通常機能の利活用をしたうえでバックアップが可能になる。首都機能のバックアップをもう少し幅広くとらえていくべき。文化庁の移転などが先行事例としてあるので、それを踏まえて首都機能のバックアップについて、行政機能の拠点化を意識しながら書くべき。
- 8点目、中心に人を置いた計画としたい。DX ではヒューマンセントリックが大前提。関西の活力を高めるという中に、これはヒトの活力を高めるので、関西に来ると、人は活性化する、というような言い方のほうが良いのでは。地域に活力を持たすというよりは、住民のみならず来訪者の活力を引き出すエリアだという観点で、キーワードなどを精査頂きたい。

【小林座長】

- キャッチコピーは宿題として、心に留めおいてほしい。
- 橋爪委員から、ストックからマネジメントへという話が出たが、これも難題である。広域地方計画のマネジメントをどうしていくか。次の有識者会議を経ながら検討していくことになる。関西らしさを出せるかどうか、本省の意向もあるかと思うので、次の課題として考えていきたい。

【澤柳委員】

- 基本目標のタイトルは関西の看板になっていく表記になるが、こういったことこそ、民間目線ではプロを使う。コピーライターやクリエイターの方に尋ねる方が、もっともらしい言葉・表現が出てくるのではないか。我々でも商品を開発する際にはプロの視点も重視しているので気になった。

【小林座長】

- プロの視点も含めて内部で検討していくが、我々も考えておく必要がある。

【高橋委員】

- 橋爪先生の指摘の中で、小林座長と同様にストックからマネジメントへという言葉に共感した。その通りで、具体的に何が当てはまるのだろうと考えていた。大阪城のパークマネジメントにしろ、空港のコンセッションにせよ、民間企業のマネジメントによって大きく変わった。関西国際空港は一時 2 兆 2 千億円の赤字があり、2016 年まで赤字であったが、マネジメントの主体が変わったことで大きく動いた。マネジメントの良し悪しは重要だ。文化財の関係にせよ、先生は利活用、という風におっしゃったが、その利活用を誰がどのようにしていくか。誰がふさわしいかをしっかり議論することが必要。観光の中で自治体の観光行政と民間が同じことをやっていることが多い。役割分担が必要であり、今後のマネジメントを考えるにあたっては、様々な事例を調べていくことが必要であろう。良いキーワードとして使えるのではないか、横串を指すには最適だと思う。

【橋爪委員】

- 官民連携の PPP や PFI の議論の中で、博物館やホールの文化施設、中央卸売市場、あるいは港湾緑地などにあっても民間活力を導入すべきだという意見がでてきている。これまで通りの管理手法でなく、用途を変えながら、従来型ではないアイデアを持って新たな施設運営を考えていくのがマネジメントである。地域のマネジメントという概念が国の計画でも出てきているので、関西でもうまく打ち出していきたい。

【奥野委員】

- キーコンセプトについて、これまでのようなもの考えるのか、それとももっとキャッチーなもの考えるのか。橋爪先生の提案のなかに短くキャッチーにという話があり、関西らしく、一般市民にも浸透しやすいものが良いのではと思った。

【小林座長】

- 全体の話を知ると、関西らしさをもっと欲しい。人にやさしいというのはどういうことか、というのが大きくなり。また防災など重要なご指摘もあった。関西らしさとは何か、国土形成計画という枠組みの中での関西らしさ、というと、各地域のクリッピングで終わってはいけない。西の拠点として、他の地域の広域計画に手を出すことは難しいが、西日本の中心、親分たる関西、というのを表に出していきたい。それが広域連携であれ、国土計画上の中核になる、という視点をどう出して書き込んでまとめていくか。
- もう1つは内在的な話として、ここから新しいものが出てくる、フロンティアをつくっていく、という関西らしさの取りまとめが必要である。課題が出てきているが、どのようにまとめるか、どう位置付けるか。問題意識をもってまとめてみると、また整理の仕方が変わるかと思う。内在的

というのはアイデアが欲しい。例えば前回の対面の有識者委員会では働き方改革の議論が出た。多様性の話も出た。前回から比べるとトーンは落ちたが、21世紀のウェルビーイングを考えるフロンティアとして何を支えるのか。これを考えればいくつか柱はあるが、働き方改革、ウェルビーイング、多様性が大きな柱になるのは紛れもない事実であり、そうした視点から位置付けていくと良いのではないか。

- 多様性について、ビジネスモデルやチャンスも多様でないといけない。今までのことを再生産しているだけでは意味がなく、多様な人たちが多様なビジネスをつくっていくようにしないといけない。
- もう一つはデジタルという国土形成計画の大きな柱、この関西らしさは何かというのも大きな宿題だと思う。DXと言っているが、あまり実現しておらず、大学を見ていると遠いと感じる。とはいえまだ大学はマシで人の移動がない。行政は2年ごとに変わっていくが、ポジションに来てDXの勉強をしている間にまた次に行ってしまう。プロフェッショナルに任せるということは欧米社会ではあり得るが、日本的な土壌の中でのDXは何か、これは真剣に考えたい。その関西らしさが何かなにかと思う。アナログツインをつくった方が良いのではとも思う。土木の世界では橋梁のBIM/CIMで精緻な写真を見るよりは、3Dプリンターで出して書き込んだ方が良い。デジタルと人間の距離が近いという関西らしさがあるのではないか。
- 関西らしさは、文化財や歴史が言われる。そのストックばかりを追っていても良くなく、それこそデジタル化しやすいとも思う。そうすれば世界からアクセスしやすいようにもできるので、そこにもフロンティアがあろうかと思う。内側から関西らしさを出す知恵を官民連携、学も入って色々考えていくというストーリーもあるのではと思っている。

(2) その他

- 大臣決定時期が令和6年度夏以降を目指すこととなった。その途中段階として中間とりまとめを令和6年夏頃の公表を目指す。
- 圏域を跨いだ広域的な連携や、若者の意見聴取についても進めて行きたい。
- 本日の発言については後日、議事録を作成の上、確認頂く。

3. 閉会